３　山王廃寺と養蚕農家群・樫ぐね

阿久津　宗二

⑴　山王集落の成立と原形

山王集落は、慶長６年（1601）秋元長朝が総社領主としてこの地に封ぜられ、総社町として成立した慶長12年（1606）より村切りされたと考えられる。総社町の内「昌楽寺廻り村」として、山王廃寺の寺域に集落が形成された。昌楽寺は、寺伝によると宝亀年間(770～780)、船尾山に建立されていたが、足利俊綱の兵火にかかり三千余坊が焦土と化したといわれている。その後、千葉介常胤が、昌楽寺を山王権現とともに上野国上野の里の地に再建したという。山王廃寺衰退の後に天台宗に転宗した。天台宗寺院の鎮守である日枝神社と接して建立されたと考えられる。

昌楽寺は弘安４年（1281）に珍尊法印が比叡山よりこの地に卓錫し中興したといわれ、寺地は山王廃寺の南東と思われる。寛永12年（1635）の「総社領之内昌楽寺廻り村水帳」には、昌楽寺除地１町７反７畝４歩とある。山王集落の屋敷数14軒、人数（名寄者数）88人であった。屋敷面積は７段５畝21歩とある。

国学者奈佐勝皐は、天明６年（1786）５月11日記の『山吹日記』に「総社の宿・古墳など廻る。北原の野に出づ、この東北に山王村とて、此処に礎石あり、上毛野の始祖の君たち御処（郡家）を祭り奉りしとかや。又の説に船尾山にまつりし山王権現の鳥居の跡なりともいへり。此の所は彼の山の方よりま向かいに向かへればさもありなん。瓦ひろいし頃より、榛名の山の上にいたう黒き雲のけしきばかり棚びきわたり、稲光りして雷の鳴りわたる」云々と記し、山王集落と山王廃寺を尋ねた状況が分かる。

明治６年（1873）の「壬申地券地引絵図」（県立文書館所蔵）をみると、絵図中に26屋敷の所有者と屋敷面積が記載されている。現在の往還・七曲がり・五千石堰用水・屋敷割といった骨格はこの時点で見ることができる。

明治24年（1891）９月「日枝神社再建寄附金」によれば、43人の氏子が記載されており、少なくとも43屋敷が存在していた。

昭和29年（1954）前橋市への合併による固定資産家屋調査では、家屋数は56戸であった。平成14年２月現在の旧集落の世帯数は69戸となった。明治・大正期にかけて分家が拡がり世帯数も増加したのであろう。

昭和46年前橋市都市計画地域区指定が行われ、市街化区域及び市街化調整区域が決定した。５千石堰用水を境として、東は市街化区域、西は市街化調整区域、農業振興地域として線引きがなされた。市街化区域では２階建てアパート・一戸建て住宅等振興住宅地が形成された。山王集落の農業形態が大きく変わったのは昭和49年から52年にかけて行われた総社町山王土地改良事業である。旧集落の屋敷地を除く540,981㎡の田畑等が該当し、これを契機に桑園が失われ、養蚕は急速に衰退した。変って蔬菜を主とする農業経営に移行していった。この事業に伴い山王廃寺寺域を解明する目的で発掘調査も実施されたのである。昭和53年には山王公民館が建設され現在に至っている。

⑵　養蚕集落景観を維持する山王地区

山王地区は都市近郊にある一般的な農村であり、地域住民も特別の集落との認識はない。しかし、文化的景観の視点でみると、述べ床面積500㎡前後の大規模な養蚕農家が数十棟並ぶ。その過半数の屋根の上には「越屋根」といわれる多様な換気用小屋根形状の小窓がついた換気口としての小さな屋根が付く。農家の屋敷の周囲は、北と西を中心に「樫ぐね」といわれる高さ10m前後の立派な防風林が植栽されている。

この防風林を持つ大規模養蚕農家群は、明治から昭和前期までの日本経済を支えた蚕糸業の産業遺産の１つである。この成立過程をみると、分家時に他地域から解体移築された藁葺きの養蚕住宅が建てられ、その後小屋組

の改変を経て総２階建てへの移行がみられるのである。

山王集落住民の養蚕農家（家屋）と樫ぐねについての認知度と関心度について高崎経済大学戸所ゼミが、2006年11から12月にかけてアンケート調査を実施した。その結果によると、「すばらしい農村景観なので残したい」という意見が68.3%、「価値ある農村景観なら残したい」が26.8%。防風林である「樫ぐね」の維持について「現状の各家庭による自己負担」が12.2%、「行政による補助」43.9%、「国の指定によって大幅な補助を受けたい」という意見が19.5%であった。

⑶ 養蚕農家・樫ぐね　その保存活用政策

文化財保護法の第２条には、「文化的景観」として「地域における人々の生活又は生業及び当該風土により形成された景観地で、我が国民の生活又は生業の理解のために欠くことのできないもの」と定義している。

当該当住民が国の文化的景観地区や伝統的建造物群保存地区への指定を望み、地域住民の賛同が得られ、研究者や行政がそれを支援するなど官民一体となって保存を考える必要があろう。樫ぐねを保有している住宅29軒についても、保存樹林として維持していきたいという意向である。

前橋市（都市計画部まちづくり課）は山王集落を「景観形成重点地区候補地として指定した。その目標として樫ぐねと大型養蚕農家に特徴づけられる集落の景観を保全し、改築の際には歴史性を受け継いでいく」としている。また、方針として「山王地区の養蚕農家・蔵と樫ぐねからつくり出される一体感のある美しいまちなみ景観を、建造物造園文化とともに文化的財産として形態を守り、これらの取り組みが可能になるよう支援体制を整える」としている。

山王集落の養蚕農家・樫ぐねの大規模養蚕農家群の文化的景観を活かす方策として、総社町及びその周辺をエリアとする歴史文化景観見学回廊（歴史散歩道）の設置が考えられる。山王地区南西１㎞には上野国分寺跡があり、南約1.5㎞には上野国の国府想定地と総社神社が鎮座する。総社町地域の天狗岩用水・光巌寺・総社古墳群・総社城址・総社資料館などの史跡や施設が多く存在している。これらと山王地区の大規模養蚕農家群と一体化した見学回廊ルートの構築が必要であり、この貴重な山王地域の資源を国指定史跡山王廃寺跡とともに保存活用をはかることが緊急な課題である。そのためには、国の文化的景観地区としての指定を受け、近隣の史跡や文化財など歴史と文化景観の見学回廊ルートを整備し、他地域から訪れる訪問客に対してサービスできる新しい環境施設をつくり、地域産業を開発することが考えられる。

山王地区には過去・現代・未来を語り、地域の活性化に対して自己実現を図れる町衆が存在する。この町衆が行政・研究者等と連携し、新たな地域文化を創造し続ける地域に変身させていきたいと構想をめぐらす次第である。

《参考文献》

・『総社領之内昌楽寺廻り村水帳』福島博愛氏蔵　1635（寛永12）年
・『壬申地券地引絵図』県立文書館蔵　1873（明治６）年
・総社町山王地区土地改良区『土地改良区誌』1979（昭和54）年
・前橋市教育委員会『利根西の民俗』1991（平成３）年
・星　和彦・平野博司・松浦利隆『近代養蚕農家の研究』群馬県立歴史博物館紀要　20号　1999（平成11）年
・戸所　隆『文化的景観としての養蚕農家とその保存活用政策』高崎経済大学附属産業研究所紀要43巻　戸所ゼミ調査報告書2007（平成19）年12月
・石田寿信『総社町山王集落における集落形成と屋敷構成の特徴について』2009（平成21）年度日本建築学会関東支部研究発表資料
・群馬県文化財研究会『上州の重要民家を訪ねる』2009（平成21）年

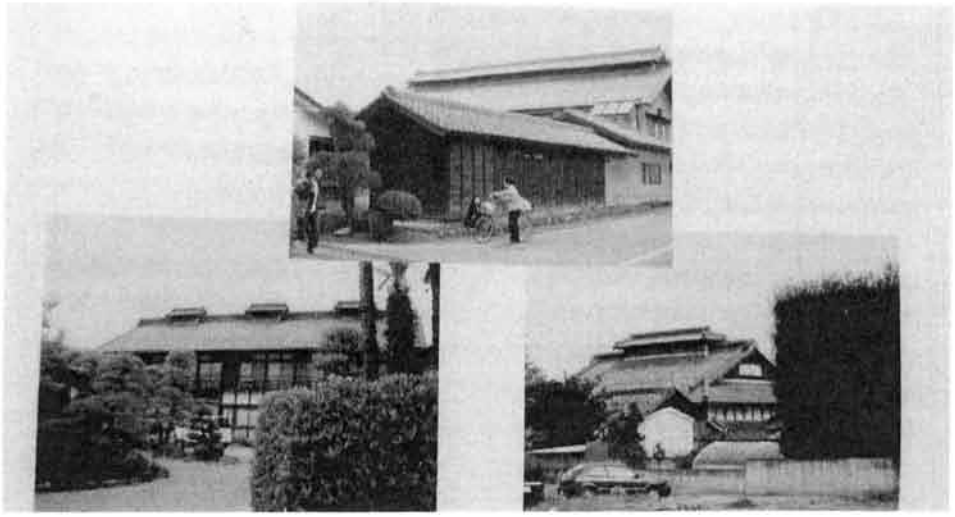

Fig.57　養蚕農家と樫ぐね